

「異国の地で学んだことと反省点」

まず初めに、私は 3 週間にもおよぶ英語研修に参加できたことを本当に嬉しくおもう。また、このような機会を与えてくださった学校関係者のみなさん、そして、参加費用を出してくれた両親に心から感謝している。

(1) パースでの生活

研修期間中、パースは夏から秋にさしかかるところだった。緑がとて多く、日本の夏のように湿度が高くないため、気温が高くても過ごしやすかった。ただ、晴れているときは雲 1 つない快晴の日が多く、日差しが強いので、日焼けどめや帽子、サングラスが必要だった。日に焼けやすい人は日焼けどめを塗らないと一日で真っ黒に焼けてしまっていた。移動には主にバスを利用していた。日本のバスのように次に停車するバス停をアナウンスしてくれないため、最初はどこで降りたら良いのか戸惑った。道を覚えるのが苦手なので、Google Maps を利用していた。これなら、自分の現在地がリアルタイムでわかるからだ。また、運転が荒いときが多かった(特に朝の通学時間帯。)ので、バス酔いをよくしていた。パースのバスは悪いことばかりではなかった。バスはいろんなところを走っており、運転手はとてフレンドリーで親切だった。また、パースの街にはキャットバスという無料のバスが走っていた。アウトレットセンターなどに行くときに大変便利だった。私はあまり利用しなかったが、鉄道も広範囲を走っていてバスと同じように便利なのだろうとおもった。現地に住んでいる人たちは親切な人が多かった。街中で道に迷って道端で地図を広げていた時に話しかけてくれて目的地まで案内してくれる人もいた。日本人は親切な人が多いと言われることが多いが、実際は、困っている人がいても無視したり、無関心を装う人が多いとおもう。それに、海外から来た見知らぬ人に対して親切にすることはなかなかできることではないからだ。私は彼らの親切さに感動し、見習わなければいけないとおもった。

(2) 英語研修プログラムに関して

英語研修プログラムでは英語を学ぶだけではなく、オーストラリアの文化を学んだり、パースの様々な場所に出かけたりした。キングスパークではオーストラリアの植物だけでなくオーストラリアの戦争の歴史、大学の教室でアボリジニの人たちの絵について学んだことが印象的だった。「戦争はいけないものだ。」と何度も言っていたキングスパークのガイドさんの表情と声色は忘れられない。



英語を学ぶ ELICOS class では英語を学ぶために英語圏外の人たちが集まっているクラスに混じって英語を学んだ。毎日午前中に授業が、週 2 日午後に授業があり、3 週間のうち 2 回 Writing Test があった。クラスには中東から来た人たちが多く、次に都市大の学生のように英語を学びに京都や沖縄から来た日本人、そして中国人がいた。英語を学ぶために来たというのにクラスにいた日本人以外の人たちは英語を上手に話すことができおり、授業初日は非常に驚いた。いざ自分もおもって話そうとしても言葉がなかなか出てこなかった。私は単語と文法が苦手だ。伝えたいことがあるのに単語がわからない。過去形や疑問文に自信が無くて言いたいことが言えない。会話に必要であろうとおもって研修前に覚えた例文は会話の場になるとド忘れてしまったりして歯がゆいおもいを何度もした。最初の頃はこんなことでやっていけるのか不安になったときに、同じクラスのある日本人の男性に「英語を話すことは難しいけれど、頑張って話していけばだんだん慣れてくるから。」

と言われて立ち直れたことがあった。彼はカーティン大学で英語を既に何ヶ月も学んでいた学生だった。私はこのことは今でも鮮明に覚えている。先生たち(午前と午後で先生が違う。)はもちろん、他のクラスメイトも英語を話すのが下手な私に英語を教えたり、親切にしてくれたりした。クラスメイトの人たちには感謝しても感謝しきれないくらいだ。Writing Test では文法のミスを基本的なものを含めていくつかしてしまった。

自分の文法のレベルを思い知らされたが、文章の構成をととても褒められた。結局、3週間ぼっちでは会話力は大して向上しなかった。しかし、英語をもっと学びたいとおもうようになった。日本で英語を学びなおし、いつか再び海外に行って英語を使った生活をしたい。



(3)ホストファミリーについて

私がお世話になったホストファミリーはイギリス系オーストラリア人のおばあさん 1 人だけだった。料理とガーデニングが好きな明るい人だった。料理好きだけあって、ごはんはとても美味しかった。しかし、衝撃的なこともあった。ホストマザーは基本的にヘルシー志向なので、料理の味が薄めだったが砂糖が一切入っていないアップルパイが出されて食べた時は目が点になってしまった。家の庭にはよく手入れされた花や植木があった。植物に水をあげるためのスプリンクラーがあったことには驚いた。家の庭には、犬(ダックスフンド)1 匹、猫(黒猫)1 匹と鳥が 2 羽がいた。

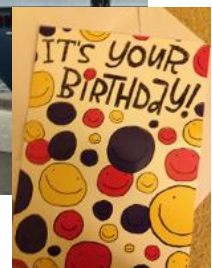
また、週末には時々、孫息子が 1 人来ていて、たまにブロック遊びの相手をした。



(4)印象的な出来事

研修中、印象的な出来事が 4 つあった。

1 つ目はロットネスト島に行った日の出来事だった。その日は私の誕生日だった。研修中に誕生日がある人が祝われているのは知っていたが、まさか自分もこうなるとはおもわなかった。ロットネスト島からフリーマントルの船着場に帰ってきた時に、研修に来ている人たちに誕生日を祝ってもらった。コメント入りの大きなバースデーカードももらった。こんなにたくさんの人に誕生日を祝われたのは人生で初めてだったので、とても驚いたうえに嬉しかった。





2 つ目は休日にフリーマントルに行ったときのことだ。古い建物が多く、綺麗な街だった。フリーマントルではお土産物がパースよりも安いときいていたが、実際その通りだった。ここは本当にパースと同じ国なのかと疑ってしまったほどだ。例えば、カンガルーやコアラの小さなぬいぐるみが、パースでは 4 つで 10 ドルだったのに対し、フリーマントルでは 6 つで 10 ドルで売っていた。パースでの値段の半分ほどで売っている商品もあった。ただ、フリーマントルで売っているものは不良品が多かったのもので、私は買う前に商品に欠陥が無いか注意深く見る必要があった。

3 つめは、パースのお店の閉店時間が早いことだ。日本のお店は夜遅くまで営業しているのが普通だが、パースのお店は 17 時頃にはほとんどのお店が閉まっていた。マクドナルドやケンタッキーなどの飲食チェーン店やコンビニは 17 時を過ぎても営業していた。ちなみに、開店時間は日本のお店とあまり変わらなかった。日によっては遅くまでやっているときもあった。ホストマザーの話によると、ノースパースのあたりは夜遅くまでレストランや飲み屋もやっているらしい。ただ、治安が悪いので危ないと言っていた。4 つめは、保冷剤を一回も見なかったことだ。大学がある日はホストマザーにお弁当を作ってもらっていた。サンドイッチにフルーツというシンプルなものだった。サンドイッチに入っている野菜もフルーツも生だ。パースは夏から秋にさしかかっていたと言っても毎日気温は 30 度前後あった。このような状況で生の野菜や果物、パンをカバンの中に入れていたら傷む。実際、パンを食べようとしたらパンにカビが生えていたり、りんごが傷んでいたときがあった。日本だったら保冷剤をお弁当に入れる家庭が多いだろうが、私が見ていた限り、研修中に保冷剤入りのお弁当を一回も見なかった。また、英語研修プログラムでチョコレート工場のお店に行ったとき、チョコレートを買っても保冷剤はつけられていなかった。

(5) 反省点

今回初めてのホームステイだったので、さまざまな場所で失敗をしてしまった。すべてではないが、私がしてしまった失敗をいくつか書き記しておく。

6-1 クレジットカード

海外でも使えるクレジットカードがあるとシンガポール空港でシンガポールドルに両替する必要がなく、もしも手持ちのお金を使いすぎてなくなってしまったときにも使えるとおもってクレジットカードを持っていったものの、海外ではあまり使えないカードだったため持っていてもまったく意味がなかった。私はそれを行きのシンガポール空港で気づき、日本円をシンガポールドルに両替した。クレジットカードはそれ以降財布のカード入れから取り出されることはなかった。

6-2 トランク

タオルや洋服などを多めにもっていったせいで荷物が重くなり、オーストラリアから帰る頃にはトランクが、自分で持ちあげられないくらいの重さになってしまった。

6-3 食べ物

ホームステイ先で出てくるご飯の量は私がいつも日本で食べている量よりもずっと少なく、英語研修中は常に空腹に悩まされていた。日本から持ってきたせんべい 1 袋ではまったく足りなかった。なので昼休みは毎日のように、他の人からお弁当の余りや日本から持ってきた食べきれない食べ物ももらっていた。カーティン大学内にあるお店やお菓子の自動販売機で何か買えばよかったのだが、パースは物価が高いので気軽に物を買う気にはなれなかった。日本からもっと食糧を持ってくればよかった。

(6)自分自身が変化したこと、英語研修の経験を今後どう生かすか

私が英語研修に参加した理由は3つあった。1つ目は、ただ単純にオーストラリアという国に行ったことがなかったため、どのような国なのか自分の目で知りたかったから。2つ目は、英語を標準語として使用している国に 行き、自分の英語力の向上につながれることがあれば良いと思ったからだ。現代社会では英語は社会人にとって必須なものであるという風潮になっている。経済や社会がグローバル化している中、世界の標準語である英語を話せないとうにもならない社会になっているからだ。英語を学ぶには英語を母国語にしている国に行くのが一番良いとおもった。3つ目は、度胸がつくとおもったからだ。英語研修に行くかどうかまだ迷っていた時にアカデミックアドバイザーの先生に相談をしたところ、「海外に行く嫌でも英語を話さなければならない。それに、度胸がつく。」と言われた。私はこの言葉で研修に参加することを決めたとと言っても過言では無い。私は何かをやらうとおもっても気おくれして出来ないことが多いからだ。そんな自分に嫌気がさしていたのだろう。

さて、結果から言ってしまうと、目的を完璧に果たすことはできなかった。

3週間という短い期間でオーストラリアという国がどのような国なのか大体理解できた。様々な人種の方たちが住んでいること、他の国では決して見ることでできないオーストラリア特有の動植物が存在すること、豊かな天然資源や自然に恵まれていること、先住民であるアボリジニの人たちのことなど、オーストラリアに行くまでは全く知らなかったことをオーストラリアの文化を学ぶ授業を通して知ることができた。それに対して、英語力は向上したとはあまり言えなかった。話す能力は3週間という短い期間で向上することはできないとわかっていて行ったが、実際そのような結果になってしまうとなんだか悲しい気分になってしまった。しかし、この3週間を無駄にしていたわけではない。毎日英語を使わざるをえない状況にいた中で、英語について学んだことや感じたことはたくさんあった。自分が知らなかった英単語はもちろん、文法でも日本ではあまり教えてくれないことや、意味が似ていて違いがよくわからない文法の意味と使い方を知ることができた。例えば、**must**と**should**と**have to**には似たような意味があるが、それぞれ使われる場面が全然違う。会話面では、自分が話しているのがたどたどしい英語だとしても伝えたいことが日本以外の相手に伝わった瞬間はとても嬉しかった。英語を話すことができれば、多くの人と意思疎通をはかることができる。私は今までよりも英語に興味をもち、もっと勉強したいとおもった。英語力とは反対に、少しだけれど度胸はついたとおもう。研修の始めの頃は自分から英語で話しかけることや、知らない土地で自分から行動することに戸惑いと恐怖を感じていた。それが無くなってきたのは研修の最後の一週間くらいになってからだった。なれないバスに1人で乗るのも苦ではなくなった。日本に帰ってからは、今まで自分から話しかけるのが苦手だった人に話しかけることができるようになった。会話が弾んだことは今でも忘れられない。

目的は必ず果たされるものではないが、目的をもって行動した先には必ず何かがあると感じさせられた3週間だった。この英語研修で学んだこと、気づいたこと、自分自身が変化したことすべてをこれからの大学生活や日常生活に生かしていきたいとおもっている。英語の勉強を続けるのはもちろん言うまでもない。それに加えて、日本の外の世界を見てきたからこそ、私たちが日本で改めて気づくことや自らできることがきっとあるはずだ。